

短編小説『夏の終わりに』

whitecaps

「どうしてなんだろう、こんなに急に一緒に買い物しようなんて。」

綾佳は太陽が照りつけるアスファルトの陸橋の上を歩いていた。空気は少しばかり涼しくなってきたが、それでも太陽の光は肌を焼くように照らしつけていた。全く暑い。ツクツクボウシの鳴き声が、もうこの夏も終わりにさしかかっていることを、それと知らせていた。橋の下をバイクが爆音を立てながら走っていく。今日は友達の可奈と一緒に買い物に来ないかと誘われたので、こんな暑い中を綾佳は歩いていた。

綾佳は女子高生。「花の」でも言えればいいものだが、今年の夏は到底そんな感じではなかった。

夏の初め頃に急に母親が死んだ。原因は脳出血。風呂に入っているときに出血を起こし、家族がなかなか出てこないことを不思議に思っただけで風呂の扉を開けたときにはもう意識がなくなっていた。そして病院で死亡が確認された。その風呂の扉を開けたのは、綾佳だった。

あまりに急なことで、綾佳は母親の死を受け入れられず、葬式の時さえ涙は出てこなかった。ただ、もつと早く気づいていればという後悔の念だけが綾佳の頭に何度もよぎった。淡々と後片付けをする綾佳のことを、周りは冷徹な娘だと思っただけかもしれない。しかしある日、母親が昔旅行の時に買ったマグカップを見て、緊張の糸が切れたのか、綾佳は人知れず大粒の涙を流した。父親のほうも母親の死以来、どうも元気がない。

そんな日々からしばらく経ち、綾佳は母親の死を何とか受け止められるようになってきていたが、今度は綾佳の心は何とも鈍い気分になるようになっていた。可奈に買い物に誘われたのは、そんな時だった。気乗り

はしなかったが、断るのも悪い気がしたし、かかつてきた電話では明るい可奈の声に押されて、しかも電話はすぐ切れてしまったので断る暇もなかった。かけ直して断りの電話を入れるのもめんどくさくて、ついに今日買い物に行くことになってしまったというわけだ。

電話の時に言われたとおり、可奈は店の建物の影になっっている入り口で待っていた。そして無言で挨拶を交わすと、まず綾佳のほうが生を掛けた。

「暑くなかった？」

可奈が首を振る。

「大丈夫、私は暑さより冷房の寒い方が苦手なの。アヤのほうこそ、暑くなかった？」

「夏は暑くてあたりまえ、もう慣れちゃった。」

綾佳のその言葉を聞いて頬を綻ばせると、

「さ、早く行き。」

可奈は綾佳の腕をつかんで引つ張り、自動ドアを通過して建物の中に誘導した。冷房の冷気が肌に触れる。

ショッピングモールの中は騒然とした明るい雰囲気包まれていた。放送のBGMに人のしゃべり声、レジのキーを叩くような音、それら全てがガヤガヤとした雰囲気醸し出していた。客の明るい様子を見て、綾佳は無意識のうちにため息をすると、可奈は戸惑った顔をした。しかし一転明るい顔に戻ると、可奈は綾佳の腕をまた引つ張った。

「うわー私ここ来たの初めてなんだー。」

可奈が吹き抜けの上を向いて大きな声を上げる。綾佳も見上げてみてその広さに驚いた。広大な空間に、たくさんの方が動いているのが見える。

「うわー！」

そして可奈は綾佳の方を向くと言った。

「今日はいろいろ買えそうだね！」

二人はその新装開店の巨大ショッピングモールの中を何時間もかけて歩き回った。まずCDショップで最新盤を確認して、試聴用の機械で試聴した後（可奈は他の客

のことも考えずに12 曲連続再生した）、本屋に入り新刊として棚に並んでいた有名人のエッセー本を読んだ。

100 円ショップでは可奈は小さなマスコット付きの携帯

ストラップを買った。綾佳は、特別何か買うつもりがあつたわけでもなかったが、思いついてお守りを一つ

買った。父親にあげるつもりなのだ。そしてその後は洋服屋に入り、服を見て回って、可奈に言われて秋物の服をいくらかかった（「うん、似合うよ！」）。買い物の

後はいろいろな店を回って貯めた福引き券を使って、回転福引きをすることにした。可奈はたわしが当たったが、綾佳は意図せずテレビゲーム機を当ててしまった（「アヤ、すごい！」と可奈が言った）。乗り気でなかったはずの綾佳も、いつの間にか買い物を楽しんでいた。

「私、なんか甘いものが食べたくなっちゃった。あのソフトクリーム屋さんに入っているかな。」

テレビゲーム機の箱の入った紙袋を手に提げながら、綾佳がはじめて自分から提案すると、

「うん、ちょうど私もそう思ってたところ。」

可奈は快諾した。そして二人はソフトクリーム屋のカウンターでいろいろと迷った後、結局綾佳はマンゴー味のソフトクリーム、可奈はグレープ味のソフトクリームにした。

二人で木で出来た一枚板のイスに腰をおろしてソフトクリームを舐めはじめると、綾佳はずっと疑問に思っていたことを言ってみた。

「ずっと疑問なんだけど、今日何でわたしなんかを買い物に誘ったの？」

可奈は少しの間無言でいると、その質問には答えずに綾佳のほうを見て、こう聞いた。

「アヤ、今日は、楽しい？」

綾佳はこの質問を不思議に思った。しかし、答えた。

「うん、楽しいよ。」

「そう、ならよかった。」

可奈が微笑む。

「どうして？」

綾佳はまたキョトンとして聞いた。

「ちよつと前、先生から聞いたの。アヤのお母さんが亡くなられたんでしょ？」

「え？……うん、だけど」

「私たち、友達でしょ？ 何かつらいことがあったら、話してくれていいんだよ。——私になんかに何が出来るかはわからないけど。」

そして間をおくと、可奈は急にうつむいて真面目な目になって言った。

「中学生の時だけど、私のお母さんが死んだの。交通事故で。」

綾佳と可奈は高校に入ってから友達になった。綾佳はまだ可奈の昔の話はあまり聞いたことはない。別段聞かなければいけない理由などなかったし、学校で何気ないことをしゃべっている限りそのような必要もなかった。だから、その話は初耳だった。確かに綾佳は可奈の母親を見たことがなかったが、そのような過去があるなど気づきもしなかった。

可奈の母親は可奈が中学生のとき死んだ。死因は交通事故。ひき逃げだった。買い物帰りに横断歩道を渡っていた可奈の母親を、信号無視の車が轢いたのだ。後続の車にまで轢かれた遺体はズタズタで、警察も尽力はしたが、事件の時に雨が降っていたこともあつて証拠が集まらず、結局犯人は捕まらなかった。そしてそれ以来可奈は涙に明け暮れる日々を送った。父親は可奈のことを一杯支えてくれたが、それでもたとえば授業参観の時に母親がこないと、その理由を思い出して暗い気分にならないことはなかった。

可奈はいつぺんに、そして淡々とそれらの話を言い終えると、こう言った。

「だからさ、アヤの気持ちよくわかるの。——あ、ごめんね、私になんかにアヤの気持ちわかるなんてそんなことないよね。うん。——でもさ、何となく……何となく、そんな気持ちがあるんだ。」

綾佳は驚いてその話を聞いていたが、気づくと、

「そんな、交通事故のほうかひどいよ。わたしより大変な体験だよ」

慌てて言った。

「でもさ——」

可奈は顔を上げて話を続けた。

「でも父さんが言ってた。車を運転していた人を恨むなら、あの時雨が降っていたことを恨みなさい。そして、何かを恨む気持ちは誰かを守りたいというやさしさの裏あわせだから、どっちの気持ちも大切にしなさいって。」

「……そうだったんだ。」

可奈はソフトクリームのコーンの包み紙をゴミ箱に捨てると、立ち上がった。そして急に明るい顔になって振り返ると、綾佳に張りのある声で呼び掛けた。

「さあ、アヤ。花火大会が始まるよ！ これを見逃したら今年の夏が終わらないんだから。早く行こうよ。場所取りしなきゃ！ じゃないと立って見なきゃいけないよ。どこか座って観れる場所をさがそ。」

「うん、……うん！」

綾佳も包み紙をゴミ箱に捨てる。そして立ち上がった。

「じゃ、行こう」

デパートの出口のドアを通りすぎる時に、綾佳は可奈に声を掛けた。

「可奈……今日は——そして、いつもありがとね」

すると少しの間、可奈は驚いた顔をしたが、無言で大きく頷いて満面の笑顔を返した。

そして夏の終わりを名残惜しむように、二人は花火を見物した。外の空気は、もう涼しかった。それは、夏の終わりだった。

綾佳は空に舞い散る花火を見て、心の中でこう呟いた。
（お母さん。私、可奈と友達でほんとに、ほんとに良かった。だってこんなに励ましてもらえる事なんてそう無いよね。そうでしょ、お母さん？）

母親の笑顔が花火をバックに浮かぶ。そして可奈のほうを見ると、視線に気づいた可奈がこちらに笑顔返すのが花火の光に照らされて見えるのだった。

■ (2008.8.26)

あとがき

さて、恒例のあとがきと参りましょう。

今回のこの短編小説『夏の終わりに』のコードネームは“rognt”です。英語的に合ってるかどうかはわかりませんが、私は「ロフト」と呼んでいます。なんか現実の世界での家具屋かなんかの名前らしいのですが、アニメ銀魂に「呂太」として出てきたので知りました。

なぜ「呂太」なのかには少し説明が必要でしょう。私は登場人物を考えると、その感覚を別の作品からの引用で行うことがあります。たとえば今回可奈と綾佳の感覚を考えるために、アニメ『テレパシー少女蘭』の蘭と翠を参考にしました（あくまで参考なので、実際は似てなかつたりすることもあります。まあ、イメージって事です）。そのオープニングで翠が洋服屋のレールに掛かっている服をずらして姿を現すところがあるのですが（ここ注目）、これが銀魂の「カーテンのシャワーのや

つ」と頭の中で繋がったのです。だからコードネームを“rognt”にしました。

私は小説を書くときのアイデアは頭にたまたま思い浮かんだ視覚的なイメージから思いつきます。あのシーンはコードネームを決めるだけでなく、この小説全体の発想起点になったと言っても差し支えありません。

今回の rognt はかなり速いスピードで完成しました。実際のアイデアはもつと前からあたたためていたにはいたのですが、企画から記述まで書き上げたのはほぼ三日ほどでした。その理由としては、中間コードの存在が上げられます。中間コードとはプログラミング言語 Java における Java ヴァーチャルマシンで実行可能なバイトコードのことですが、わたしが小説を書くときのバイトコードとは、企画書から最終記述を書き起こすための準備段階の記述のことです。普通の小説は過去形と現在形の文が交互に現れるので、最終記述を書き上げた後追加や削除を加えると交互の順番が狂ってしまいます。また、私の小

説はほとんどセリフで話が進行するので、いちいち語り調で書いていると変更があったとき面倒です。そこで、文末を無効化して脚本のような書き方で中間コードを書きます。ついつい私はこの作業をとばしてしまうのですが、今回はこれを徹底したところ文が簡潔になり、執筆スピードのアップに繋がりました。まあ、もともと長い小説ではないですが……。

今回の小説のテーマは友情です。あまりにベタな話の進み方だと私も書いていて思いましたが、この際それは無視しようと思いました。また、今回は題名にもしたとおり「夏の終わり」もテーマです。

ベタと言えば交通事故もそうでしょう。『誤送』でも使った要素なので、ちよつとくどいかもれません。しかし他に思いつかなかつたのと、韓国ドラマでも多用される要素なのでまあいいやと思って書きました。「交通事故」は小説家にとってとても便利な設定なわけですね。

可奈の母親の死の時雨が降っていたのも私の日常の記憶から発想を得ています。

私が小説を書くとき登場人物の親が死んでいることが良くあります。別に死んだ設定にしたいわけではないのですが、なんとなく私にとって「親がいない」ということが「自立した一人の人間」としての位置づけを与えるような気がして、そういつた設定にするのだと思います。それは親から自立できていない自分の意識の葛藤の裏あわせなのでしょう。

夏の始まりから、夏の終わりまで、今年は私にとってもあまり華々しい夏ではなかったですが、この小説で一つの区切りをつけたいと思って書きました。私の個人的な話をすれば、今年の夏はさんざんでした。いつもお世話になっている祖父が胃がんの手術後に肺炎を起こして今も意識がない状態です。しかも今年の夏は雨天により花火を見損なつてかなり心残りとなりました。

でも、そんなことばかり言っているもしようがないですね。皆さんにとって、これからの季節が心温まるものがありますようお願いしています。最後まで読んでいただき、有り難うございました。

■ (2008.8.28)